

たいよう

根^ね本^{もと}
紋^{あや}歌^か

わたしのおとうさんは、いちねんじゅうまっくろに、ひやけをしてる。それは、あついとさきもさむいとさきもかぞくのために、がんばってしごとをしているからだ。おとうさんのしごとは、あきからはるにかけてとてもいそがしくなる。わたしがねているあいだにかえってきて、あさはやくしごとにでかけてしまう。いつしゅうかんじょう、かえってこれないこともしょっちゅうだ。そんなときは、

「ばばにあいたいな。おともだちのおとうさんは、いつもいっしょにいれていいなあ。」

と、おもしろい、とてもさみしいきもちになる。でも、おとうさんは、しごとのあいたじかんをみつめて、でんわをしてくれたりかぞくのかおをみにきてくれたりする。わたしは、そのじかんをとてまたのしみにしている。

「ただいま。」

と、こえがきこえると、わたしといぬにひきはだだだどとげんかんへとはしり、そして、いっせいにとおとうさんにだきつく。みんなおとうさんがだいすきで、いつもとりあいになるのだ。

「おかえりなさい。ばばつかれてない。」

と、きくと、

「つかれていたけど、あやかのおをみたらげんきになったよ。ありがとう。」

と、えがおでこたえてくれる。すこしのじかんでもおとうさんにあえると、さみしかったきもちもふつとび、わたしもげんきになれるのだ。

いつもはなかよしのおとうさんと、ときどきけんかをしてしまう。そんなときは、

「ばばなんか、だいきらい。」

と、おもしろい、くちもさかなくなる。でも、いつのまにかけんかしていることもわすれて、ふたりでわらっている。わたしのおとうさんは、なかなかおりのてんさいなのだ。

おとうさんのまわりは、いつもえがおやわらいこえでいっぱいあふれている。おとうさんは、みんなのこころをあたたくしてくれて、たいようのようなひとだ。

だいすきなおとうさん。

つかれているときやこまっているとき、こんどは、わたしがおとうさんのたいようになるからね。いつも、ありがとう。